



「誰一人取り残さない」というキーワードを持つ SDGs

「SDGsと聞いてあなたは何を思い浮かべますか?」「SDGsの実現のためにあなたは何をしたいですか?」という言葉から、第19回ブックトーク&井戸端会議「SDGsに詳しくなろう」講座はスタートしました。

SDGsは「持続可能な開発目標」と訳され、人類が安定してこの世界で暮らしていくために2030年までに達成すべき17の目標です。すべての人がそのために行動することが必要で、今のままではこの地球上の問題は解決しないのです。具体的に、人類はどんな問題を抱えているのでしょうか。

例えばポテトチップスなどに使われる植物性油脂は、熱帯雨林の森を切り拓いて栽培されているアブラヤシから採れるパーム油が使われることが多いですが、そのために、もともと生息している動植物が追いやられ生きていけなくなり、多様性もなくなっています。これに対しては、企業のつくる責任、消費者のつから責任のもとに今までのやり方を変えなければいけません。(目標12・15)

また、貧困・暴力・差別下におかれた人々のことを考えると、カカオ栽培(チョコレート)・レアメタル採取(携帯電話)・綿花栽培(衣服)等は、私たちの生活のための資源獲得の手段ですが、ここでは子どもたちが安い賃金で働いています。危険な仕事を長時間強いられることも多く、十分な教育を受けられず、大人になっても貧困から抜け出すことが難しくなり、特に女兒に至っては、教育を受けられない上、幼くして結婚させられること(児童婚)により妊娠・出産で命を危険にさらされます。さらに紛争下の子どもは、麻薬を使って兵士にさせられる、人身売買など、人権をないがしろにされています。(目標1~6・8・10・16など)

女子教育が行き届くと、早婚が減り、親も変化するといえます。「語弊があるが、男の子一人より女の子一人の教育の方が影響がある」とのことです。

大きな問題を見ると私たちになにができる?という気持ちになりますが、コロナ禍の中での差別をしない(シトラスリボンプロジェクト)、エシカル消費(商品を買うことによって、どういった裏の影響があるか考える)、SDGsをブームで終わらせない、ゴミを分別する、目の前の子どものためになることを考えるなど、講師からの意見も含めていろいろな意見があがりました。講師の安藤さんは、自治会活動もされていて、男ばかりで、防災など特に女性が声をあげて頑張らなければならないと思うそうで、そのためには自信をもって発信することが大切だということです。個人の活動も大事ですが大きなシステムを作らなくては進まないことも大きいとのこと、さいたま市はSDGs未来都市に選定されているので、期待したいところです。(野田)



2020年9月19日 パートナーシップさいたまにて行われた、女性学研究会主催のブックトーク「SDGsに詳しくなろう」(講師安藤由美さん・埼玉県ユニセフ協会)の報告です。

『男が痴漢になる理由』

斉藤章佳 イースト・プレス
(2017年)



この本を読みながら、思い出した。若いころ一人で映画を観るのが好きだった。座席は端にとり、空いている隣の席には荷物を置いて座らせないようにしながら。ところがその日は隣に強引に座った男がいて、しばらくしてから触ってきた。怖くて気味が悪いし、映画を途中で逃げ出した。最初は恐怖感が強かったが、しばらくして怒りが湧いてきた。なぜ大好きな映画を途中にして逃げなければならぬのだ。それから半世紀も過ぎたが痴漢はなくなる。

男が痴漢になる理由が色々書いてあって、そうなのかと付箋を貼りながら読み進めたが、なぜか腹が立った。これは私だけの感情なのか。社会に根強く残る性差別がある限り痴漢はなくなるとしたら、被害を受ける女性がたくさんいるのだ。痴漢をして逮捕されて反省し謝罪し罪を償ったとしても再犯率は高く、「加害者は自分がしたことを都合よく忘れる」とあって、それでは被害者の苦しみはなくなるのではないかと、どうしても女性の側で考えてしまう。

著者は、精神保健福祉士・社会福祉士で、痴漢が自身の罪を償い、専門機関での治療を受けて痴漢行為を手放す者が増えれば、痴漢を減らすことが出来るという。痴漢は、依存症で、実態を見誤っているうちは、痴漢は減らないと訴える。加害者本人もだが、その家族への支援も必要と実感した。

併せて『「ほとんどない」ことにされている側から見た社会の話。』タバブックス(2018年)を読んだ。性暴力被害、痴漢犯罪、ジェンダー格差など多くの人がフタをする問題取材し、発信し、声をあげ続ける小川たまかに共感した。性差別・性暴力問題が大きく報じられ、声をあげる人たち(女性たち)がいる。私は、被害者、当事者の声に耳を傾けたい。

痴漢をテーマにした本も現れた。知ることから始まる変化に期待したい。(磯部)

『愛という名の支配』

田嶋陽子 新潮文庫
(2019年)



田嶋陽子著『愛という名の支配』(新潮文庫刊)

1992年に刊行された本の文庫版で、田嶋陽子さんがTVなどで強くメッセージを放っていた頃の著作の一つです。大学生だった私は、アカハラ・セクハラに直面して、解決する方法もわからず、田嶋陽子さんの考えに触れ正気を保っていたように思います。田嶋先生に対する番組内での扱いに抗議の手紙を出すほど見ていましたが、TVでのバッシングに乗った大衆の攻撃はひどいものがありました。

この本は、幼少の頃の話から始まり、家庭・世間・仕事・結婚などに視点が伸びていき、そのすべてに男尊女卑構造(ガレー船のたとえが印象的)が立ちはだかっているという、とても身近なことを述べた本です。

私が一番共感したのは「女を分割して統治せよ、それが結婚制度」のあたりです。なんで子どもを産まされなくてはならないの?とか、しかも他人名義で?とか、素朴な疑問に率直なたとえで分かりやすくお腹に落ちるように語られています。「やっぱりおかしい!!」と足場を確認して踏ん張る力をくれるのです。子を産むことが搾取される仕組みが、作られているのです。「自分の“足”で自分のお金を稼ぐことが自立の基本」の項には、「この世の中には金よりも大事なものがある」という言葉は稼ぐ権利をないがしろにされてきた女に言えることばでもなく女が言うことばでもない。女の文句を封じこめるエセ美德だ、という見事な内容も。ぜひ手にとって自分にとっての金言を見つけてください。(野田)

『権力と新聞の大問題』

望月 衣塑子

マーティン・ファクラー

集英社新書

(2018 年)



難しいタイトルである。普段だったら手に取らない本のはずだが、今回は違う。直前に望月衣塑子著『新聞記者』を一気に読んだ。官房長官時代の菅さんの天敵といわれた、望月さんの真っ直ぐな人間性に裏打ちされた記者魂に魅せられた。その望月さんと、国際的なジャーナリストであるマーティン・ファクラーさんの対談を読まない訳にはいかない。

本の中で望月さんは、「政治に対するチェック機能だったはずのメディアが、ネット社会の中でチェックされる側になって、国民は政治と同時に既存のメディアをも疑って見ている状況」と言う。確かにそうだ。私が望月さんを知ったのは、しつこい程質問を繰り返す記者がいる、というネットニュースだった。そこから芋づる式に様々な事実を知り、疑念が生まれた。質問は前もって提出するとか、決められた時間の順守と質問を優先する望月さんへの同僚記者からの非難、etc.

会見の場に参加できるのは『記者クラブ』のメンバーだけというルールもある。このテーマについては対談でも話し合われていて、作られた当時の必要性が時代の流れの中で失われていること、にもかかわらず相変わらずの体制のままでは、読者の支持を得られないという危機感がある、と望月さんが語っている。

私はトランプ大統領の記者会見などで、アメリカの記者が鋭く切り込んでいく姿勢をうらやましく思っていたが、ファクラーさんの「過去に国民の信頼を失った事件があり、その反省が下地となって奮起している面がある」のことばに、過ちを未来に生かしていくことに意味があるのだなあ、と思ひ至った。

お二人の様々な観点からの対談を読むことで整理できた側面があり、何より不思議に明るい気持ちになって湧いてきた。お勧めの一冊である。(宇野)

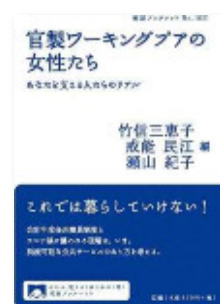
『官製ワーキングプアの女性たち—あなたを支える人たちのリアル—』

武信三恵子 戒能民江

瀬山紀子 編

岩波ブックレット1031

(2020 年)



コロナ騒動のさなか、ある自治体の業務に関する情報で、非正規公務員は休みで、職員が窓口業務や電話対応をするようになり、市民からは「あんたでは話が分からん、いつもの人いないの!」「いつもの人なら話早いのにあんた仕事わかってる?」と混乱していると聞きました。

そんなに職員は仕事がわからないのかと疑問に思っていた時にこの本を読み、わかりました。でもこれでいいのかと疑問がわいてきました。『公務員と聞くと、「安定した働き方」という印象が定番になります。でも、2000 年ごろから、年収 200 万円前後で短期契約の不安定な非正規公務員が激増していることを、どれだけの方がご存じでしょうか。』という前書きでこの本が始まります。

コロナ自粛の時、急に学校・幼稚園・保育園などが休校になり、子供たちが家に居るため仕事を休むことで社会は混乱しました。社会を動かしているのは非正規の子育ての方々、ほとんどが女性です。そして収入が減り、仕事をなくした人たちは生活が困窮しているにもかかわらず手が差し伸べられず、これからの生活設計が立たないため不安から体調を壊す方もいます。子ども達も将来に希望が持てずに悩んでいます。どうして女性はこのような扱いを受けるのか・・・

2020 年 10 月 13 日「非正規 賞与・退職金認めず」「格差不合理でない」との最高裁判決の文字に唖然としました。非正規労働者は社会に経済に貢献していないの? 日本のために働いているのに、確か「同一労働同一賃金」ではないのかと怒りはおさまりません!

ぜひ読んでいただき、社会の仕組みに関心をもって考えてもらえればと思います。(あや)

さいたま市女性学研究会(ゆい)主催「ブックトーク&井戸端会議」

第20回「コロナ禍で何を思いますか。」

2021年2月21日(日)14:00~16:00 パートナーシップさいたま第三会議室

<参考図書>



『知っておきたい感染症—新型コロナと21世紀型パンデミック 新版』ちくま新書 岡田晴恵 2020年



『新型コロナウイルスの真実』KKベストセラーズ 岩田健太郎 2020年

※その他お手持ちの本

コロナ感染防止のため、全国の小中高に臨時休校が要請されたのが2020年3月2日、緊急事態宣言発出が4月7日でした。その後、緊急事態解除宣言は5月25日、学校も6月1日より分散登校がはじまりました。感染者は減ることもなく、マスク着用、手洗い、密を避ける生活は続いています。そのような生活を、皆様はどう過ごしていますか。そして、何を思ったかなどを語り合しましょう。

参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。

☑️パートナーシップさいたま耳寄り情報☑️

生き方を選ぶ・踏み出す講座<オンライン>

離婚してもしなくても 知っておきたいこと

講師：大森三起子さん(弁護士、法テラス埼玉地方事務所川越支部長)

配信期間 令和3年1月15日(金)~24日(日)「基礎知識」

1月22日(金)~31日(日)「様々な選択肢」

●視聴方法 YouTubeで限定公開

●対象 さいたま市在住、在勤、在学の女性

●定員 40名(先着順) ●費用 無料

●申込 12月3日(木)9:00~1月13日(水)Eメールで受付
パートナーシップさいたま

danjo-kyodo-sankaku@city.saitama.lg.jp まで



「ゆい」2020年冬号 第2号 (2020年12月1日発行)

編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字 野田

<事務局>磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com



発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮3F 電話 048-642-8107

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/index.html>